

武蔵野日曜集会

ラザロの復活

――ヨハネ伝第11章1～44節――

1984年10月7日(武蔵野)

小池辰雄

この病は死に至らず 我は復活なり生命なり 全的体受 もし信ぜば神の栄光を見ん ラザロよ、出で来たれ 矛盾構造 詩天野貞祐「わが人生」

【ヨハネ11・1～44】

1 爰に病める者あり、ラザロと云う、マリヤとその姉妹マルタとの村ベタニヤの人なり。2 此のマリヤは主に香油をぬり、頭髮にて御足を拭いし者にして、病めるラザロはその兄弟なり。3 姉妹ら人をイエスに遣して『主よ、視よ、なんじの愛し給うもの病めり』と言わしむ。4 之を聞きてイエス言い給う『この病は死に至らず、神の栄光のため、神の子のこれに由りて栄光を受けんためなり』5 イエスはマルタと、その姉妹と、ラザロとを愛し給えり。6 ラザロの病みたるを聞きて、その居給いし処になお二日留り、7 而してのち弟子たちに言い給う『われら復ユダヤに往くべし』8 弟子たち言う『ラビ、この程もユダヤ人、なんじを右にて撃たんとせしに、復かしこに往き給うか』9 イエス答えたもう『一日に十二時あるならずや、人もし昼あるかば、此の世の光を見るゆえに蹟くことなし。10 夜あるかば、光その人になき故に蹟くなり』11 かく言いて復その後いい給う『われらの友ラザロ眠れり、されど我よび起こさん為に往くなり』12 弟子たち言う『主よ、眠れるならば癒ゆべし』13 イエスは彼が死にたることを言い給いしなれど、弟子たちは寝ねて眠れるを言い給うと思えるなり。14 爰にイエス明白に言い給う『ラザロは死にたり。15 我かしこに居らざりし事を汝等のために喜ぶ、汝等をして信ぜしめんとてなり。然れど我ら今その許に往くべし』16 デドモと称うるトマス、他の弟子たちに言う『われらも往きて彼と共に死ぬべし』

17 さてイエス来り見給えば、ラザロの墓にあること、既に四日なりき。18 ベタニヤはエルサレムに近くして、二十五丁ばかりの距離なるが、19 数多のユダヤ人、マルタとマリヤとをその兄弟の事につき慰めんとて来れり。20 マルタはイエス来給うと聞きて出で迎えたれど、マリヤはなお家に坐し居たり。21 マルタ、イエスに言う『主よ、もし此処に在ししならば、我が兄弟は死な



ざりしものを。²²されど今にても我は知る、何事を神に願ひ給うとも、神は与え給わん』²³ イエス言い給う『なんじの兄弟は甦えるべし』²⁴ マルタ言う『おわりの日、復活のときに甦えるべきを知る』²⁵ イエス言い給う『我は復活なり、生命なり、我を信ずる者は死ぬとも生きん。²⁶ 凡そ生きて我を信ずる者は、永遠に死なざるべし。汝これを信ずるか』²⁷ 彼いう『主よ然り、我なんじは世に来るべきキリスト、神の子なりと信ず』²⁸ かく言いて後ゆきて竊にその姉妹マリヤを呼びて『師きたりて汝を呼びたもう』と言う。²⁹ マリヤ之をきき、急ぎ起ちて御許に往けり。³⁰ イエスは未だ村に入らず、尚マルタの迎えし処に居給う。³¹ マリヤと共に家に居りて慰め居たるユダヤ人、その急ぎ立ちて出でゆくを見、かれは歎かんとて墓に往くと思ひて後に随えり。³² 斯てマリヤ、イエスの居給う処にいたり、之を見てその足下に伏し『主よ、もし此処に在ししならば、我が兄弟は死なざりしものを』と言う。³³ イエスカれが泣き居り、共に来りしユダヤ人も泣き居るを見て、心を傷め悲しみて言い給う、³⁴ 『かれを何処に置きしか』彼ら言う『主よ、来りて見給え』³⁵ イエス涙をながし給う。³⁶ 爰にユダヤ人ら言う『視よ、いかばかり彼を愛せしぞや』³⁷ その中能わざりしか』³⁸ イエスまた心を傷めつつ墓にいたり給う。墓は洞にして石を置いて塞げり。³⁹ イエス言い給う『石を除けよ』死にし人の姉妹マルタ言う『主よ、彼ははや臭し、四日を経たればなり』⁴⁰ イエス言い給う『われ汝にもし信ぜば神の栄光を見んと言ひしにあらずや』⁴¹ ここに人々、石を除けたり。イエス目を挙げて言いたもう『父よ、我にきき給ひしを謝す。⁴² 常にきき給うを我は知る。然るに斯く言うは、傍らに立つ群衆の爲にして、汝の我を遣し給ひしことを之に信ぜしめんとてなり』⁴³ 斯く言いてのち、声高く『ラザロよ、出で来たれ』と呼ばわり給えば、⁴⁴ 死にしもの布にて足と手とを巻かれたるまま出で来る、顔も手拭にて包まれたり。イエス『これを解きて往かしめよ』と言ひ給う。

⁴⁵ 斯てマリヤの許に來りて、イエスの為し給ひし事を見たる多くのユダヤ人、かれを信じたりしが、⁴⁶ 或者はパリサイ人に往きて、イエスの為し給ひし事を告げたり。

⁴⁷ ここに祭司長・パリサイ人ら議會を開きて言う『われら如何に為すべきか、此の人おおくの徴を行ふなり。⁴⁸ もし彼をこのまま捨ておかば、人々みな彼を信ぜん、而して 로마人きたりて、我らの土地と國人とを奪わん』⁴⁹ その中の一人にて此の年の大祭司なるカヤパ言う『なんじら何をも知らず。⁵⁰ ひとりの人、民のために死にて、國人すべての滅びぬは、汝らの益なるを思わぬ



なり』⁵¹これは己より云えるに非ず、この年の大祭司なれば、イエスの国人のため、⁵²又ただに国人の為のみならず、散りたる神の子らを一つに集めん為に死に給うことを預言したるなり。⁵³彼等この日よりイエスを殺さんと議れり。

●この病は死に至らず

これはご承知のとおり、『無者キリスト』の中に私は書いておきましたが、別にそれを繰り返すわけではない。『無者キリスト』の中には、キリストが甦らせた例を三つあげてあります。ラザロの復活は一番あとのところです。これはキリストの伝道のところで、ヤイロの娘、ナインの若者、ラザロの復活の三つをあげてある。このラザロの復活の記事はヨハネ伝だけです。

¹爰に病める者あり、ラザロと云う、マリヤとその姉妹マルタとの村ベタニヤの人なり。

これは三人兄弟ですね。

²此のマリヤは主に香油をぬり、頭髮にて御足を拭いし者にして、病めるラザロはその兄弟なり。

キリストに香油を注いだとか塗ったとかいう記事は、マタイ、マルコ、ルカにもあるので、このマリヤか、また他の女性もやっとうし、マグダラのマリヤかもしれない。そこらは学問的には結論は出てこないけれども、「ナルドの香油」というところに私は詳しく書いてありますから、あれをまたお読みになつてください。これも『無者キリスト』に出ています。

³姉妹ら人をイエスに遣して『主よ、視よ、なんじの愛し給うもの病めり』と言わしむ。

この「愛し給う」は、「アガペー」でなくて、非常に人間的な「フィレオー」という字が使つてある。

⁴之を聞きてイエス言い給う『この病は死に至らず、神の栄光のため、神の子のこれに由りて栄光を受けんためなり』

まあ驚くべきひとですね。状態が何もこちらではお話していないのに、もうちゃんとそれが見えていらつしやる。そして、これは死んだのではないと言う。まあこんなひとは他にいない。「死に至らず」と言つたつて、もう死んでいるんですよね、実際のところは。

⁵イエスはマルタと、その姉妹と、ラザロとを愛し給えり。

こつちの方は「アガペー」という字が使つてある。

⁶ラザロの病みたるを聞きて、その居給いし処になお二日留り、⁷而してのち弟子たちに言い給う『われら復ユダヤに往くべし』。弟子たち言う『ラビ、こ



の程もユダヤ人、なんじを石にて撃たんとせしに、復かしここに往き給うか』
危ないではないですかというわけです。

9 イエス答えたもう『一日に十二時あるならずや、人もし昼あるかば、此の世の光を見るゆえに蹟くことなし。10 夜あるかば、光その人になき故に蹟くなり』

私は昼間に行くんだ、夜襲を受ける必要はないんだと。

11 かく言いて復^{また}その後いい給う『われらの友ラザロ眠れり、されど我よび起こさん為に往くなり』

目を覚まさせるために行くんだと。

12 弟子たち言う『主よ、眠れるならば癒^いゆべし』13 イエスは彼が死にたることを言い給いしなれど、弟子たちは寝^いねて眠れるを言い給うと思えるなり。

弟子たちは知らないからね。

14 爰^{こゝ}にイエス明白^{あらわ}に言い給う『ラザロは死にたり。15 我かしここに居らざりし事を汝等のために喜ぶ、

いなかつたから良かったと。

汝等をして信ぜしめんとてなり。然れど我ら今その許に往くべし』

まあケタが違うんですね、キリストの信というものと普通の人の信仰なんてものは。

16 デドモと称うるトマス、

「デドモ」というのは「双生児」というギリシア語です。

他の弟子たちに言う『われらも往きて彼と共に死ぬべし』

17 さてイエス来り見給えば、ラザロの墓にあること、既に四日なりき。

四日目なんです。キリストは三日目に甦^{よみがえり}ったんですが、ラザロは四日目なんだ。

●我は復活なり生命なり

18 ベタニヤはエルサレムに近くして、二十五丁ばかりの距離なるが、19 数多^{あまた}のユダヤ人、マルタとマリヤとをその兄弟の事につき慰めんとて来れり。20 マ

ルタはイエス来給うと聞きて出で迎えたれど、マリヤはなお家に坐し居たり。

マルタとマリヤはこういうようにちがう。マルタは行動的で、マリヤはじつとして聞く方で、動と静みたいな女性です。「家に坐し居り」というのは、もう悲しくて動けないんだ。

21 マルタ、イエスに言う『主よ、もし此処に在^{いま}ししならば、我が兄弟は死なざりしものを。

あなたがいらつしやつていれば助けてくださったのに、もう既に時遅しというわけだ。

22 されど今にても我は知る、何事を神に願ひ給うとも、神は与え給わん』

まあマルタは一応、そういうことを言つて、信仰告白をしたわけだ。



23 イエス言い給う『なんじの兄弟は甦えるべし』

「復活する」と。この「甦る」というのは正に「起き上がる」というような意味の字です。

24 マルタ言う『おわりの日、復活のときに甦えるべきを知る』

神学的なことを言っている。終りの日には甦ることになる、それは分かっていますと。

25 イエス言い給う『我は復活なり、生命なり、我を信する者は死ぬとも生きん。』

26 凡そ生きて我を信する者は、永遠に死なざるべし。汝これを信するか』

25節は非常に大事な節です。力強い節ですね。自分自身が復活であり生命であると。これはキリストは三日目に甦ることをちゃんと知ってらっしゃるし、「永遠の生命」とあると言う。

「アナスタシス(復活)であり、ゾーエー(生命)である」

と言うんです。

●全体的受

「我を信する者」という、このキリストが言う「信する」という言葉は本当に大変なんです。「信する」というのは

「全的に受けとる」

ということ。我々の普通の信仰なんていうのはキリストの信仰と違う。全体的受です。からだで受けとる。「体」というのは全存在です。全体的受を信という。全的なんですから、こちらは無なんです。こちらが無者でなければ、全的には受けとれない。こちらがサムシングだったらダメなんです。だから、しょっちゅう言っているんだ、

「キリストの無者である。無者であるから、いよいよ無者たれ」

ということ。そうすれば、全的に受けとる。全的に受けとると、これが信で、信の対象はキリスト。だから、キリストの中にすっかり入ってしまう。「エン・クリスト」と言っているわけです。「キリストの中に」というのは全的に受けとっている。「エイス・クリストン」「キリストの中へ」ということです。

「およそ生きて我を全的に受けとるものは永遠に死なない。お前は本当にこれを受けとるか」

と。今の人たちは、「知る」という認識の方ばかりなんです。

「百知は一信にしかず」

という。百も知ったって、一つの信にはかなわない。頭でいくら解つてもダメなんです。そういう文化人が多いわけだ。この信は全体的受です。神学者だってみんなダメです。

「預言者は故郷に入れられず」

と言うけれども、本当にそう思うね。我々はもういわゆる相対的な生死を超越した世界です。それを越えている、本当に超越なんです。高山樗牛は、

「吾人はすべからず現代を超越せざるべからず」



と言った。有名な言葉だね。相対的現実を超越して、本当の絶対的現実の中へ入れというわけです。そこまで標牛もわかつてないけれども。

26 凡そ生きて我を信する者は、永遠に死なざるべし。汝これを信するか』²⁷ 彼
いう『主よ然り、我なんじは世に来るべきキリスト、神の子なりと信ず』

まあ一応、答えはいいんです。「世に来るべきキリスト、神の子」と。

28 かく言いて後ゆきて窃にその姉妹マリヤを呼びて

なぜ、「ひそかに」かという、他のユダヤ人に気がつかれないようにというわけです。キリストはユダヤ人に嫌われているし、危ないから。

『師きたりて汝を呼びたもう』と言う。29 マリヤ之をきき、急ぎ起ちて御許に往けり。30 イエスは未だ村に入らず、尚マルタの迎えし処に居給う。31 マリヤと共に家に居りて慰め居たるユダヤ人、その急ぎ立ちて出でゆくを見、かれは歎かんとて墓に往くと思ひて後に随えり。32 斯てマリヤ、イエスの居給う処にいたり、之を見てその足下に伏し『主よ、もし此処に在ししならば、我が兄弟は死なざりしものを』と言う。

マルタと同じようなことを言った。「どうにも、惜しいことです」というようなわけです。

●もし信ぜば神の栄光を見ん

33 イエスカれが泣き居り、共に来りしユダヤ人も泣き居るを見て、心を傷め悲しみて言い給う、

この「心を傷めて」は、「傷める」ではなくて、ある憤りの気持を持っている。御霊におけるひとつの――「憤り」と言う、ちよつと言葉が誤解されるかもしれないけれども――非常に靈動している。靈動的な気持なんです。心が霊的に震えて悲しんだということ。

34 『かれを何処に置きしか』彼ら言う『主よ、来りて見給え』³⁵ イエス涙をながし給う。

人間的な面と両方持っている。心と霊。心の方は涙を流す。霊は、

「そんなことじゃないぞ、大丈夫だ」

と言う。霊、心、体。これは一如です。人間の構造は分析できない。理解の上で多少、分析しても実体は分析できない。ただし、いつも霊が主導です。これが主導になって動いていく。普通なら、悲しんでお終いだけれども、悲しんでお終いではない。涙の奥には光が来ているんです。

36 爰にユダヤ人ら言う『視よ、いかばかり彼を愛せしぞや』

これも「フィレオ」という字が使つてあるね。ラザロに対する「愛」という字にはこの「フィレオ」という字が使つてあるのはおもしろい。

37 その中の或者ども言う『盲人の目をあけし此の人にして、彼を死なざらし



むること能わざりしか』

「能わざりしか」とは、これは事情がわかっていないものだから。なにもそこに居たわけじゃない。

³⁸ イエスまた心を傷めつつ

これがさっきの、一種の霊的な憤慨、憤りです。憤りというか、ちよつと言いにくいですが、それでも。

墓にいたり給う。墓は洞にして石を置きて塞げり。

全く洞窟みたいな所ですよ。

³⁹ イエス言い給う『石を除けよ』死にし人の姉妹マルタ言う『主よ、彼ははや臭し、四日を経たればなり』⁴⁰ イエス言い給う『われ汝に、もし信ぜば神の栄光を見んと言いにあらずや』⁴¹ ここに人々、石を除けたり。イエス目を挙げて言いたもう『父よ、我にきき給いしを謝す。』

「目を挙げて」とよく書いてある。キリストは天を仰いで、神さまとパツと一つになつてしまふんだね。そしてもう未来完了なんです。未来の完了を現在完了にしてしまふ。だから、「聞き給いしを謝す」と言う。「聞き給うであろうことを」なんて言つてはしない。

⁴² 常にきき給うを我は知る。

この「知る」は頭じゃないですよ。本当に自分というものが抜けているひとだね、このキリストというひとは。こないだの詩にも私は書いたでしょ、「我なき我」という言葉を。「ダス・イツヒ・オーネ・イツヒ」という。……ちよつと異言が出そうになった。

然るに斯く言うは、傍らに立つ群衆の爲にして、汝の我を遣し給いしことを之に信ぜしめんとてなり』

余計な註解みたいなことを仰つたけれども。みんながよく信ずるために――「常にきき給うを我は知る」で、そこで結構なんです。「斯く言うは……」は要らないわけなんだけれども――みんなのために、横にいる群衆のために、そういうように言われた。

●ラザロよ、出で来たれ

⁴³ 斯く言いてのち、声高く『ラザロよ、出で来たれ』と呼ばわり給えば、

大声で叫んだ、「ラザロよ、出てこい」と。父の言葉を、神の力を、神の声をそのままキリストはそこに言うわけです。だから、

「父と我とは一つなり」

の境地なんです。父と我が一つでなければ、こういう言葉は出てこない。これはいわゆる確信ではない。よくね、知らない人は、「信念、信念」なんて言うけれども、「信念」なんていうものではない。

⁴⁴ 死にしもの布にて足と手とを巻かれたるまま出で来る、顔も手拭にて包ま



れたり。

レンブランドの絵にもある。大変なことだ。

イエス『これを解きて往かしめよ』と言ひ給う。

⁴⁵斯^かてマリヤの許に來りて、イエスの為し給ひし事を見たる多くのユダヤ人、^{とび}かれを信じたりしが、⁴⁶或者はパリサイ人^{びと}に往きて、イエスの為し給ひし事を告げたり。

またこれがパリサイのキリストをやつつける種になる。

日蓮が、お母さんが死んだ時に、少し遅ればせながら行つたんです。そして、誦^{じゆきやう}經して、こういうことが書いてある。父はその五年前に亡くなっているんだな。それで清澄の方へ出掛けて行つた。清澄は故郷ですから。小湊の方です。小湊という所にはよく私は陸軍の幼年学校の水泳の訓練に行つたことがある。

「このほどらしい妙蓮尼

お母さんの名前だな

病の床にうち伏しおわせしが、今朝秋風の肌寒きにふと胸の支えのさしつめて今絶え入れり。日蓮驚きてはせより、日蓮にてそろうと耳に口あて声を限りに呼べども叫べども亡き魂のそれと答うるによしなし。日蓮床のべに端然と坐し、丹精をこらして五經を讀^{よみ}誦し、この經の功德をもつて再び蘇生せしめ給えと肝胆を砕き祈りけるに、愛児の心の誠は慈母の懷に通じ、病即消滅の文に至つて縷^{いと}の如き氣息出で次第次第に回復し、目を開き掌を合わせて南無妙法蓮華經と唱う。日蓮が日々夜々、衣を脱がで

の看護に日ならずして妙蓮尼は本復する。」

と。亡くなったお母さんを甦らせてしまった。

キリストの、このラザロは四日目ですから、これはもう大変なことです。ラザロの「復活」と言う。これは息を吹き返したと、みんな思うわけですよ。けれども、この復活は次元がちがう。このラザロの中に入ってきたのはキリストの霊ですから。これは霊^い氣^きですから、今までよりもっと力強い生命体がここに入れたわけです。今までの肉体を生かしていたような生命体では、これは復活しはしませんよ。これはもの凄い霊氣が入ってきた。だから、死が生に変わった。

人間の運命はまた死に行く。我々は聖霊のバプテスマを受けたけれども、やっぱり死ぬことは死ぬ。相対的な死はくるけれども、しかし、

「我を受けとつた者は永遠に死なない」

とキリストが言われた。相対的な我々の存在はまた、聖霊を受けても死にますけれども、しかし、その聖霊を受けた御霊がきている生命はもう永遠の生命を中に持っている。霊^い生^{せい}を。

「肉の体あり、霊の体あり」

という。霊生がきている。霊^い体^{たい}の核がちゃんときている。これが天界に行くわけです。



●矛盾構造

だから、このラザロの復活のことは、

「我々は普段生きているような顔しているけれども、実は死んでいるではないか、
何がその本当の生か」

というわけです。

「噫われ悩める人なるかな、此の死の体^{からだ}より我を救わん者は誰ぞ」(ロマ7・

24)

と、パウロがああローマ書7章で言っているのは、相対的パウロはローマ書7章のような
悩みの存在だけでも、パウロは既に救われて、

「我らの主イエス・キリストに頼^よりて神に感謝す」(ロマ7・25)

「汝なるがゆえに感謝す」と言つて、あそこでひっくり返されている。そして、8章でもの
凄くきている。この7章は、パウロが救われない前の言葉ではない。7章は、救われてから、

「本来の我はこんな情けない者だけでも、しかし、第二の生命がきてからのパウ

ロはローマ書8章のパウロだぞ」

というわけです。だから、「旧き我」が7章で、「新しき我」が8章だが、新しき我において
旧き我を語っている。

人間というのはみんなそういった矛盾構造なんだ。矛盾構造だけれども、それがやがて
永遠の生命になる。その矛盾構造を持たなかったのはキリストだけなんだ。キリストでも、
ある意味においては、矛盾構造とも言えますけれども、しかし、それはキリストは我々の
「弱き」を全部持つている。即ち、キリストは「肉となった」というのは、肉となりながら、
このキリストの肉は完全に内側からもう霊化されている肉だから、キリストにおいては霊
肉渾然たる存在なんです。

我々も、ある意味においては霊肉渾然だけれども。しかし、もつと深刻な矛盾構造になつ
ている。それは何も心配することはない。我々の中にこの聖霊がきている。御霊がきていれば、
これは決して死んでも死なないところにきているんです。でも、いわゆる信仰状態がおか
しくなっている。

私は自分で言つたらおかしいけれども、私はスランプになつたとか、おかしくなつたと
か、そういうことは正直なところもうなくなつたね。いろんなことにでつくわけばでつく
わすほど、逆に力がくるから、しょうがない。けれども、人間の構造としてはもちろん矛
盾構造です。普通はみんな――いろんな段階がありますから――生きているようだけれど
も、実は生ける屍^{しかばね}だという。トルストイの言葉にもあります。そういった生ける屍式な生
き方をしている。けれども今度は、祈りの世界で、「ラザロよ、起きよ」式に、キリストの
御言でもって生かされた。

聖霊は一遍本当に受ければ、もう断然たる次元の相違がきますけれども、それで、「ああ、



よしよし」ではないですよ。いつも進んで行かなければならない。波状的に進んでいく。それが信仰生活ですから。やつぱり、聖霊の人としての鍛えがいるわけだ。どんどん鍛えられて進んでいく。

我々はラザロの復活をただ、ラザロの不思議な復活とか、素晴らしい復活とか思うのではなく。もちろん、それはいいですよ、客観的には。大変なことだ。

「キリストの生命というのはなんと素晴らしい生命だろう、そろそろおかしくなりかけた身体をも甦らせてしまったとは。こんなもの凄いキリストなら、私もこのキリストに祈りかかりましょう」

と。そうしたら、みんな祈りの世界でもの凄い力がくる。それが

「キリストを全的に受けとる」

ということ。私がなぜ、「無」なんていうことを言うかというところ、そういうわけなんです。

「こちらをサムシングになんかしていたらダメなんだ。自分の信仰がサムシングだなんて思ったらダメだ、絶しろ。キリストの信が入ってくるぞ」

と。そういうことです。ラザロの復活よみがえりにおいて我々もまた、

「我は復活なり、生命なり」

というキリストと共に、「我は復活なり、生命なり」ということで、人をまた甦らせ、生命させるところの媒介者とならなければならぬ。

友だちが集会に来なかったり何かしたら、「どうしたね？」と、みんな愛をもって問いかけなくてはいけませんよ、もつとお互いに。「人はどうでもいい」なんていうことであつたら、召団なんていうものは成り立たない。

「この頃さつぱり来ないではないか。どうしたんだい？」

と、大いにお互いに助け合つて行つてくださいよ。

●詩天野貞祐「わが人生」

今日はだいたい獨協関係の諸君がいるので――天野先生が9月30日に天界で百歳を迎えた。わたしは9月29日の夜から30日の丑三つ時にかけて、四、五時間で詩を書いた――その詩を今日はみなさんに紹介する。これは天野先生の一生です。「わが人生」という題で天野先生の立場で私は書いた。これは「嗚呼玉杯に」の曲で歌える。こないだ先生の家へ行つて、私は小さな集会をしてこれを歌った。みんなびっくりしていた。

「わが人生」

――天野貞祐獨協学園長の天界における百歳の日（1984年9月30日）を迎えて――

獨協中学・高等学校第十四代校長 小池辰雄（作詞9月29日夜 歌詞「嗚呼玉杯に」）

1 ああ古典書に親しみし

少年時代のなつかしや



わがたましひの故里よ

ひるは野山を駆けめぐり

夜はわが祖母に書を読み

三つ児だましひ創造られぬ

昔は、漢籍やなんかを読ませられたんです。私の母もそうでした。大体、向こうでいうと、ギリシア・ラテン語。こちらでいうと、漢文だの古文。そういうものを小さい時から素読させる必要があるんだね、本当は。マンガばかり見ていたら、もう日本は亡びるよ。

2 故里鳥屋を離れて

鳥屋は山梨県の北の方です。

都は独協中学に

入りて四年のゆくなべに

「ゆくなべに」というのは、「ゆくかたわらに」ということです。

夢中なりしは野球かな

これは、先生は野球をやって身体を鍛えようと思ったんだよな。

試合に出でて滑りこみ

そこねてわれは捻挫せり

3 順天堂に通ひしも

湯河原温泉湯治にも

効果あらず里がへり

ときしもチフス流行りたり

母とわれとは感染し

母はみまかり吾は遺る

自分は遺って、お母さんは死んでしまった。

4 身代わりの如母去りぬ

ああ断腸のわが想ひ

天地晦冥絶望よ

空ゆく雲に母を呼び

星を仰ぎて母を呼ぶ

かくて月日は流れたり

5 「わが子よ泣くなとりて読め」

「とりて読め」というのは、アウグスチヌスが困ったときに、「とりて読め」という声が――「トレ・レゲ」というラテン語ですけれども――子供たちが歌っていたのを聞いて、それで本を開いたのがローマ書13章です。

母のみ声か、立ち帰り



ひもときし書は内村の
「最大遺物後世への」

『後世への最大遺物』という本です。

わがたましひに光さし

力を得たり全身に

6

かくて勉強にうちこみて

捲土重来独協の

狭き門をば突破して

16人受けて――転入学でたった一人しかとらない――天野先生が一番で、天野先生だけが入れた。四年生でやめて、そして五年に入ったから、四年までの全科目の勉強をしたんですよ。試験は全科目です。凄い試験です。

最上級に入学す

人生道の礎石を

与へられたる四年なり

四年間のマイナスが、しかし、もの凄いプラスになったわけです。医者になろうと思ったんだ。独協に入る人はみんな大体、医者になろうと思うんだからね。

7

医師たらんとの路を変へ

教育者たる道のため

一高文科を選びたり

授業はドイツ語興味あり

ヒルティを知りわが道は

いよいよ定か教育者！

8

安息日は寮を出で

風雨にめげず柏木へ

本郷から柏木まで歩いたわけです。

徒歩にて通ひ内村の

聖書講義を聴きたれば

必ず出掛けて行った。おにぎりを持ってね。昔は本当におにぎりでしたよ、お昼なんては。

畏神の心据えられて

教育心の基礎成りぬ

9

岩元先生われに告ぐ

ドイツ語と哲学の先生です。天野先生は教育学をやると思ったんだ。

「教育者たる道ならば

哲学道を往け天野！」



哲学をやれと。その時に京都大学が哲学はいいですから。

かくて京大哲学の

道に踏み入り夜も昼も

ひたすらはげむ哲の学

10 七高教授時代には

七高というのは鹿児島です。

哲人カントの大著たる

『純粹理性批判』をば

翻訳すべき使命受け

孜々^{しし}宮々と夜は専ら^{もは}

カントカントで暮しけり

もつばらカント。『純粹理性批判』というのは大変な本でね、読むだけでも大変なのに、これを最初に翻訳された。

11 学習院の時代には

ハイデル往きの旅に出で

九鬼周造に彼の地にて

出会ひし幸を忘れめや

哲学の視野ひろまりて

みのり豊けき旅なりし

ハイデルベルクに行った。九鬼周造というのは大変な秀才です。天野先生が「あんな秀才は見たことがない」と言った。今、岩波から全集が出てます。

12 哲学界の鬼才たる

わが友九鬼は『文芸論』

これは最後に書いた素晴らしい芸術論です。これは読まれるといい。「これを書いたら自分は死んでもいい」と彼は言った。

遺して去りぬ技巧無き

絶対矛盾の一者たる

九鬼さんという人はなかなか性格的にそういった面があつたものだからね。「絶対矛盾の」――けれども、非常にそれは深い統一をなしているから――「一者」というのはそういうことです。

彼の生涯^{いのち}を哲学の

自証^{みづか}なりしぞあな床し

13 時はめぐりて京大の哲学道へ帰りゆく

また京大の教授にさせられた。



時局の危機を憂ひたる

『道理の感覚』わが理念！

『道理の感覚』というのには有名な本です。軍部のために絶版になった。

まことのロゴスを踏みにじり

軍部わが書を寸断す

あれは岩波から出した。岩波の人たちがこれを切り刻んだときに泣いたという。

14 甲南校長時代にも

あらしはやまず講堂を

兵器の庫とすべしとの

あらぬ要求を拒みけり

将校が二人やってきて、講堂を兵器庫にしろと言うんだ。けれども、天野先生はダメだと
言って断った。先生は本当に勇敢に戦ったですね。

戦時といへども教育を

見棄つることのあるべきか

15 一高校長時代こそ

天野先生は非常にこの一高時代が一番好きなんだ。

わが人生の繁光なりし

わが人生の春なりし

この一高の生徒のとき。

一高時代がよみがへる

柏の徴なつかしき

一高学徒と暮しけり

私も一高に入りたくてしうがなかった。今でも悔しがっている。

16 しかはあれども時じくぞ

教育界にあらし吹き

容れられざりきわが理念

一高の運命ここに尽き

われは直ちに職を辞し

時計の台に別れたり

これは時計台のこと。「時計台に懐かしい別れをした」と書いてある。

17 吉田総理の依頼あり

文部大臣になれかしと

われは情なく拒みしが

総理自らおとづれて

あの吉祥寺の家におしのびでやって来た。

もとめたりしが断れば

その袂より置き手紙！

「君がもし居ないといけないと思って、ちゃんと手紙を書いてきたんだ」と言つて、玄関を出るときに袂から手紙を渡した。この手紙を私はそのまま拝見しました。素晴らしいです。

18 愛国の情切々の

その文面はわれを打つ

されどわが意は変らざり

さもあらばあれ意を決し

心を殺しわれ起ちて

文部の長の座につきぬ

文部大臣なんかにはなりたくなかつたんだ、天野先生は。文部官僚が嫌いだから。

19 文部行政まこともて

企画新たにうち出せる

二三の業は遺りしが

新企画をなさった。

「国民実践要領」に

これが、「またもとへ返った反動だ」と、みんなにやられた。そうじゃないんですけれどもね。間違つた民主主義に対して書いた。

意を尽せしも甲斐ぞなき

二年三月われ去りぬ

それで、天野先生はそうなったら、パツと辞めてしまう。先のことなんか考えない。そして、家でじつとしていたら、

20 かくてありしが羽仁もと子

敬神愛国さながらの

自由学園われを呼び

理事の長にと請願めたり

その教育の實踐に

われは欣び諾しけり

自由学園というのは、お小遣いさんも使わない。全部、全校でもつてする。食事のことも、野菜を作ったり、花を植えたり。素晴らしいです。

21 時しもあれやわが母校

独協学園危機にあり

切なる声にわれ起ちて



校長として復興の
わざを進めて十余年
教育愛を貫けり

天野先生の教育方針のことをちよつと歌にうたつた。

22 「心正しく身は強く
知性輝ふ善意志よ
情操美しく品ありて
天資開発文化には

「天資」というのは天から賜った資質。

創造的な人ぞ」是れ

わが教育の理念なる

23 時期は来れり宿願の

独協大学創立よ

関湊氏の献身の

協力得たり草加なる

零線地帯に草わけの

工事を成せり大林

24 わが学徒らよ「大学は

学問による人間の

形成さるる場にぞある」

「大学は学問を通じての人間形成の場である」という有名な碑がある。

学にうちこみ実力を

深く養ひ創造の

閃きのある人と成れ

ここらは私が想像して書いた。

25 歴史は旧し独協は

医学界とのゆかりあり

隠れし素志の実現は

独協医大の創立よ

ところは何処栃木なる

千生の原野を卜したり

26 関理事長と曰独の

医の学界の石の橋

石橋博士欣然と

石橋さんは日独の医学界の橋みたいな人だから。

独協医大の創設に

力尽せしあなうれし

白亜の城ぞ聳えたる

27 独協学園進み往く

ついに成りしは埼玉の

独協高校「創造と

信愛・開拓」校是なり

「創造・信愛・開拓」が学校の方針だということ。

わが意を得たり進めかし

中高目白と相和して

28 わが事終る教育に

生涯をかけて悔はなし

天界よりぞわれ祈る

独協学園百年を

祝してわれは今ここに

百歳の日に感謝する

29 独協百年われもまた

彼岸の国に来て見れば

昔なじみの影多し

真理を生きし土井・出射

土井さんというのは素晴らしい哲学の先生です。華嚴経を独訳した。四冊あります。大変なドイツ語です。それに打ち込んで仆れた人です。それから、こないだ亡くなった法学部の出射さん。あの「提言」というのを書いていた。

学園建設の閑湊

われら親しく握手せり

30 ああ独協の人々よ！

君ら知らずや天界に

不滅の独協成りゆくを

されば乾坤相呼びて

独協気質勇ましく

進み往かなむ永遠に

そういう詩です。これは「嗚呼、玉杯」で歌える。これは今度の「独協百年」の本に載せるつもりです。ちょっと歌ってみようかな。（1、4、8、12、13、15、22、29、30節を独唱）

